

やまのいものパイプ栽培における良質・多収生産技術

[要約] やまのいものパイプ栽培において、高品質化と多収を図るためには、種いもの重量は75 g程度が良く、用土は透水性が良好な砂質土が良い。また、マルチ幅は100cmが適し、栽植密度は農家慣行より密植にすることにより多収が得られる。

八女分場・中山間地作物研究室

連絡先

0943-42-0292

部会名	園芸	専門	栽培	対象	根菜類	分類	普及
-----	----	----	----	----	-----	----	----

[背景・ねらい]

やまのいも（じねんじょう）は中山間地域の環境条件及び圃場条件に適する作物として生産されているが、その栽培管理方法は農家によって異なり、生産上の不安定要因となっている。そのため、良質・多収を得るための栽培法を確立し、地域特産物としてやまのいもの定着化を図る。

[成果の内容・特徴]

- ①いもの収穫量は、種いもとして、いもの中央部分を用いた場合及び種いもが重いほど多いが、種いも数の確保を考慮すると75 g程度が良い（表1、2）。
- ②パイプ用土の種類は透水性が良好な砂質土（真砂土）が優れ、詰め込み重量は5 kgとすることにより、高品質・多収となる（表3）。
- ③マルチ幅は50cmとした場合に最も多収となるが、マルチ幅が狭いと雑草が繁茂するので除草の労力と収量を考慮すると100cmが適する（表4）。
- ④栽植密度は、農家慣行（畦幅160cm、株間35cm）より密植（畦幅120cm、株間23cm）にすることによって多収が得られ、掘り取り作業が効率的に行える（表5）。
- ⑤栽培床は、幅12cm、深さ45cmの埋設溝をトレンチャーで掘り、長さ135cm、直径6cmの塩化ビニル製のパイプを斜めに埋設し、アルミ蒸着フィルムでマルチをする。
- ⑥催芽後1芽に調整した種いもを植え付け、高さ2mの棚栽培とする。

[成果の活用面・留意点]

- ①やまのいもの生産が不安定な中山間地域において、やまのいもの特産化を図る場合の栽培技術として活用できる。

[具体的データ]

表1 種いもの部位別収量 (平成2年)

種いもの 部 位	収穫いも		収 量 kg/10a
	重 量 g	長 さ cm	
首 部	732	148	1394
中 間 部	993	141	1891
尻 部	850	131	1619

注) 用土量はパイプ当たり5kg、  
種いも重は75gとした。

表2 種いもの重量別収量 (平成2年)

種いもの 重 量	収穫いも		収 量 kg/10a
	重 量 g	長 さ cm	
50	337	94	642
75	545	111	1038
100	617	113	1175

注) 用土量はパイプ当たり5kg、種いもはいもの中央部分を使用した。

表3 パイプ用土の種類及び詰め込み量と収量・品質 (平成2年)

パイプ用土 種 類	収穫いも		収 量 kg/10a	すりおろしいも			
	重 量 g	長 さ cm		粘 度 Pa・s*	褐変程度 (0無~3多)	食 味 (1不良~5良)	
粘 質 土	499	124	950	53	0.5	3.9	
黒ボク土	556	158	1059	58	1.1	3.7	
砂 質 土	750	139	1429	67	0.8	3.7	
詰め込 み重量	5 kg	732	148	1394	68	0.6	4.4
	4 kg	499	124	950	53	0.5	3.9

注) ①粘度は、B型粘度計(東京計器製)で測定した。数値が大きいほど粘度は大。

②用土の種類では用土量はパイプ当たり4kgとし、種いもはいずれも75gとした。

表4 マルチ幅と収量 (平成3~4年)

マルチの幅 cm	平成3年度		平成4年度	
	収 量 kg/10a	平均いも重 g	収 量 kg/10a	平均いも重 g
50	1196	628	1206	645
100	1074	564	1170	575
150	827	434	1023	568

注) 用土量はパイプ当たり5kg、種いも重は75gとした。

表5 栽植密度と収量 (平成5年)

うね幅 cm	株 間 cm	m <sup>2</sup> 当たり 栽植本数 本	収穫いも		収 量 kg/10a
			重 量 g	長 さ cm	
160	23	2.7	602	125	1636
160	35	1.8	793	136	1416
120	23	3.6	765	132	2772
120	35	2.4	868	130	2067

注) ①慣行法はうね幅160cm、株間35cm。

②用土量はパイプ当たり5kg、種いも重は75gとした。

[その他]

研究課題名: 地域資源を活用した中山間地作物の安定栽培技術の確立

予 算 区 分: 国庫(中山間)

研究 期 間: 平成5年度(平成2~5年)

研究担当者: 執行明久、久保田朗、大賀康之

発表論文等: 平成2~5年度 福岡県農業総合試験場八女分場 試験成績書